

東南アジアの世界遺産を訪ねました（ベトナム編）

世界遺産をよく理解するには、その国の歴史を知ることが役に立ちます。ベトナムは、古代には百越^{ひゃくえつ}と呼ばれる多数の諸民族が暮らしていた土地でしたが、紀元前 3 世紀に秦の始皇帝の統治下に置られました。始皇帝の死後、秦が弱体化すると、地方を統治していた趙佗^{ちょうた}が独立して南越国^{なんえつこく}を建国しました。これがベトナムで生まれた最初の国家だといえます。南越国は現在の広州^{こうしゅう}からハノイまで含む北ベトナム一帯に広がっていました。

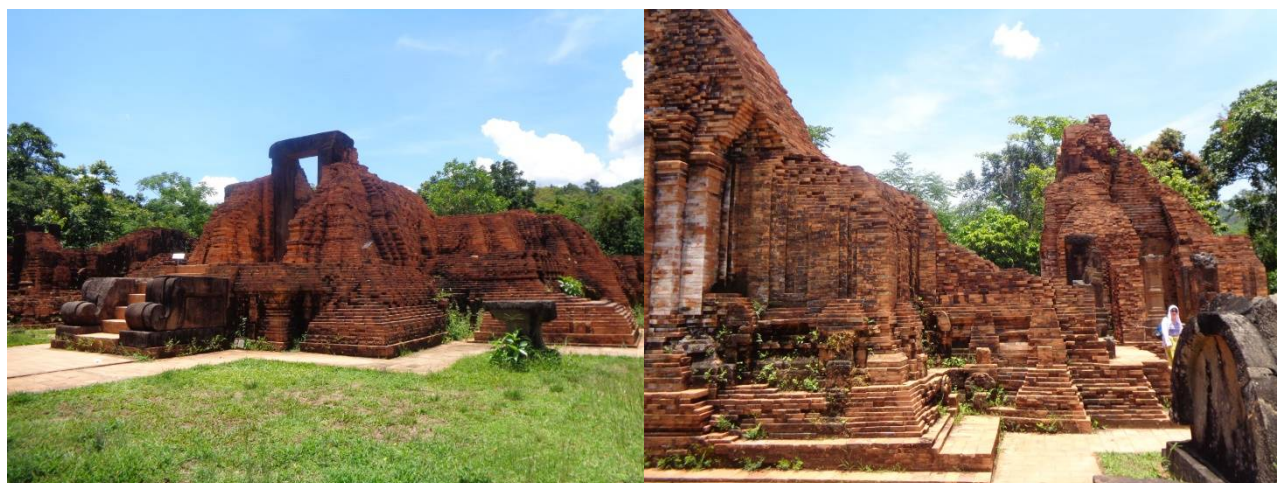
南越国は独立したのも束の間、紀元前 111 年に漢によって滅ぼされてしまい、その後およそ 1,000 年にわたって中国の影響^{こうが}下に入ることになります。地図で見ると良くわかりますが、ハノイのある紅河デルタは、中国の雲南地方から海に出るための交通の要衝に当たります。中国の王朝にとっては、交易の拠点として重要な場所だったのです。

一方、ベトナム中部では 2 世紀末にチャンパ王国が興りました。チャンパ王国でヒンドゥー教シヴァ神信仰の聖地だった場所が**ミーソン聖域（My Son Sanctuary）**です。4 世紀に建築が始まったとされ、8 世紀から 13 世紀の遺跡が現存しています。

チャンパ王国の文化は、インドのヒンドゥー教に精神的な起源を持っているといえます。クリシュナ神やヴィシュヌ神、そしてとりわけシヴァ神といったヒンドゥー教の神々の精巧な彫像をいたるところで見ることができます。

建造物は、接着剤を使わずに焼成レンガを摺り合わせて構築されていることや、ローマ建築に見られるようなアーチではなく、石を互い違いに組んで屋根を架ける工法などに特徴があります。

遺跡はグループ A から H まで 8 つに分かれていますが、これは寺院が明確に定義された境界をもっていたことを示しています。



グループ A の中心にあるレンガ積み^{しどう}の祠堂は保存状態が特に良好で、チャンパ美術の頂点を示しているという



グループ E,F では発掘調査が行われていました



グループ C の遺構と筆者

ミーソン聖域へ行くには公共交通機関がありません。私はホイアンのホテルでタクシーを手配してもらい、往復 80 万ドン（約 4,500 円）でした。片道 1 時間くらいかかるので、日本の感覚からすると高いかもしれません。

遺跡は溪谷の奥にあるため、ゲートから電気カーに乗って中に入っていきます。遺跡本体は、コンパクトにまとまっていて遊歩道も整備されているので容易に見学できます。ところどころに巨大な扇風機やベンチもありました。



ミーソン聖域で最も印象が残ったのが右の看板です。素晴らしいと思いませんか？ 自然や文化財を大切にしようという気持ちをユーモアたっぷりに表現していますよね。

TAKE NOTHING, but pictures.
LEAVE NOTHING, but footprints.
KILL NOTHING, but time.



なお、後述するフエも位置的にはチャンパ王国の領域に相当しますが、フエに王朝が栄えたのはずっと後の時代になります。

ハノイから南へ約 100km、ニンビンにある**チャン・アンの景観関連遺跡群 (Trang An Landscape Complex)** は、3 万年前から人類がこの地域の自然と順応しながら生活してきたとして、複合遺産かつ文化的景観として登録されています。**古都ホア・ルー、チャンアン・タムコック・ビクドン景観地域、ホア・ルー特別利用林**の 3 つの保護地域があります。

豪族の地方割拠が進んでいた 10 世紀半ば、ディン・ディエン・ホアンがベトナムの北部を統一しました。これがディン（丁）朝で、989 年を太平元年としてベトナムで初めて元号を定めました。ディン朝の後を継いだ前レ（黎）朝の時代には、チャンパを支配下に収めてベトナムを統一します。ホア・ルーは 968 年からタン・ロンへ遷都される 1010 年までディン朝と前レ朝の都でした。その中心地だったと推測されている場所に、ディン・ディエン・ホアンと、2 代皇帝レ・ダイハンの祠が建っています。



古都ホア・ルーの城門



ディン・ディエン・ホアン祠

自然遺産としては、湿潤な熱帯環境における塔状カルスト地形の発達段階を示す卓越した地質学的遺産と評価されています。かつて海底にあった石灰石の山塊が陸上に隆起して、500 万年をかけて円錐台、塔状地形、コックピット、ポリエ、鍾乳洞など典型的なカルストを形成しました。チャン・アンは、周囲の河川とは隔絶されていて、天水のみでなる珍しい地形でもあります。

ボートツアーで、狭くて暗い鍾乳石の洞窟をくぐったり、歴代の皇帝を祀る祠や寺院を巡ったりすることができます。



手漕ぎのボートで洞窟探検（旅先で出会ったインド人若夫婦と）



ムア洞窟の山頂に登ると塔状カルスト地形がよくわかります

11 世紀には、リー（李）朝によって中国から完全に独立を果たし、ハノイの紅河デルタに首都が築かれました。タン・ロン城は 7 世紀に中国が築いた要塞跡に創建された皇城で、**ハノイにあるタン・ロン皇城遺跡の中心地（Central Sector of the Imperial Citadel of Thang Long – Hanoi Citadel of the Ho Dynasty）**として世界遺産に登録されています。その後、支配する王朝の交代はありながらも、政治権力の中心として 19 世紀まで続きました。

タン・ロン城に現存する建造物は、19 世紀後半から 20 世紀にかけてのものです。正門にあたる**ドアン門**と、王の側近たちが利用していた**ハウ・ラウ宮殿**は、真正性を損なわないように修復・改修されています。



城の表門にあたるドアン門



ハウ・ラウ宮殿

リー王朝を創始したリー・タイトー（李太祖）の船団がハノイの地に近づいた時、「黄金の龍が現れて天高く飛び立った」という伝説があり、タン・ロンとは昇龍を意味しています。その名の通り、いたるところで龍のモチーフが見られます。皇帝の居住空間であったキンティエン殿の跡にも 4 匹の龍の正面階段が残っています。マヤ文明のククルカン（羽を持つ蛇の姿をした神）を連想しますね。

敷地内にあるエキジビジョン・ルームに、城や宮殿の最上部を飾っていた龍や菩提樹の瓦など、多彩な出土物が展示されています。



敬天殿（キンティエン殿）の正面階段の龍



建物の屋根に用いられた装飾の龍

ベトナムでは、龍は力・繁栄・幸運・権力の象徴であり、民俗・文化・芸術に深く根付いています。建物の門や屋根などはもとより、生活のあらゆるところで龍が用いられていて、ベトナムそのものを表していると言っても過言でないかもしれません。

19 世紀以前の古い建物は木造であったため残っていませんが、**ホアンディウ 18 番地遺跡**で遺構を見ることができます。タン・ロンには 800 年にわたって各王朝が都を置いたので、各時代の遺跡が重なっています。ここでは、中国や古代チャンパ王国の影響がうかがえるレンガや陶磁器の他、日本の有田焼・伊万里焼も発掘されており、広く文化の交流があったことを反映しています。



ホアンディウ 18 番地遺跡



敷地内では発掘調査が進行している



砲弾の跡が残る北正門

13 世紀の後半に元が勢力を伸ばし（日本でいう元寇の頃です）、その影響で内乱状態に陥った後、ハノイの南方地域に存在したのがホー（胡）朝でした。1398 年～1407 年という短期間の王朝でしたが、**胡朝の要塞（Citadel of the Ho Dynasty）**は、巨大な石材を積み上げた東南アジアにおける築城様式の代表例として、世界遺産に登録されています。

城塞全体は風水原理にしたがって建設されていて、朱子学が伝播した証拠とされています。石造りの城門など 3 つの構成資産に囲まれた中に、巨大な石壁を備えた城塞がほぼ無傷のまま保存されていると考えられています。

古くはチャンパ王国の時代から、アジアとヨーロッパを結ぶ海のシルクロードの拠点として重要な港町だったのが**古都ホイアン** (Hoi An Ancient Town) です。最盛期の 16～17 世紀には日本の朱印船も盛んに往来していました。中心部にある来遠橋は日本人が建築したということで「日本橋」とも呼ばれており、街のシンボルになっています。

ホイアンは小さな街なので歩いて回ることができます。レンガや木造の壁を持つ伝統的な建築群は、うなぎの寝床のような細長いレイアウトや、螺鈿らでんの緻密な彫刻に特徴があります。

川には堤防がなくて洪水になると建物の中まで水が入ってくるので、荷物や商品を 2 階に上げるための巧妙な仕掛けがあり、**タン・キ旧家**や**フン・フン旧家**などで見ることができます。**クアン・タン旧家**ではホイアン名物のホワイトローズ（白いバラのような形の蒸し餃子）をいただくことができます。



来遠橋（日本橋）



旧家の 2 階から覗く街のたたずまい



夕暮れになるとランタンで照らされます

ホイアンといえばランタンを連想する人が多いと思います。もともとは中国から伝わったもので、邪気払い・魔除け、幸運・幸福の祈願という意味をこめて、ホイアンの文化として根付きました。日本人が提灯を持ち込んだ影響があったという説もあります。毎月旧暦の 14 日の夜にランタン祭りが開催されているので、その日程に合わせて訪れるとより楽しめると思います。

ところで、私はネット大手の予約サイトで宿を予約していたのですが、行ってみたらそのホテルがなくて（すでに廃業していた）とても焦りました。でも困っている私に近所の人々が声をかけてくれて、すぐに代替りのホテルを見つけることができました。バックパッカーに優しい街だと思います。

ホー朝が減じた後の 15 世紀初頭は明がベトナムを支配しますが、後レ（黎）朝によってベトナムが解放されます。その後 200 年ほどの動乱の時期を経て、1802 年にグエン（阮）朝が誕生します。この都が置かれたのがフエで、ベトナムの政治・宗教・文化の中心地となりました。

世界遺産に登録されている**フエの歴史的建造物群 (Complex of Huế Monuments)** は、グエン朝の王宮の他、歴代の皇帝の陵墓や寺院、海岸を守る要塞など 14 の構成資産からなります。グービン山とフォン川という自然景観を生かしながら、古代の東洋哲学である五行論に基づいて巧みに配置されています。

都の中心にあったのが**王宮**です。北京の紫禁城をモデルにしたといわれ 4 分の 3 ほどの規模で建築されました。600m 四方ほどの広い敷地に多くの建築物が残っています。

正門である**午門**をくぐると正殿の**タイホア殿（太和殿）**が見えます。その裏にある**ヒューヴー／ターヴー（右廡／左廡）**は高級官吏の詰所でした。向かって左方向のエリアに、歴代皇帝の位牌を祀る**テートー廟（世廟）**、その前閣である**ヒエン・ラム・カック（顯臨閣）**。奥に進むと初代ザーロン帝の皇太后の住居であった**ジエント宮（延寿宮）**と 2 代ミンマン帝の皇后の住居であった**チュンサン宮（長生宮）**。右方向のエリアには 3 代ティエウチ帝の書斎であった**タイ・ビン・ラウ（太平樓）**などがあります。**ロイヤルシアター（聞是堂）**ではユネスコ世界無形遺産の**宮廷雅楽ニャー・ニャック**を鑑賞することができます。



午門は 3 つの入口があるが真ん中は皇帝専用なので閉ざされている



ヒエン・ラム・カックの前には天子の象徴とされる国宝の鼎がある



タイ・ビン・ラウは最も装飾が美しい

他の 13 の構成遺産は広域に広がっているので、すべてを見学するのは大変です。日本でいうと百舌鳥・古市古墳群を回るようなイメージでしょうか。シティサイトシーイング・フエという乗り降り自由の周遊バスが市内を巡回していて、これを使うのが便利ですが、それでも残念ながら全部を回すことはできませんでした。時間が許すなら 2 ～ 3 日滞在してゆっくり散策したいところです。



グエン朝の歴代皇帝のうち、初代**ザーロン帝**、2代**ミンマン帝**、3代**ティエウチ帝**、4代**トウドウック帝**、5代**ズックドウック帝**、9代**ドンカイン帝**、12代**カイディン帝**の**陵墓**が世界遺産に登録されています。陵墓といっても日本の天皇陵とは趣が異なります。陵墓全体が寺院の境内のような領域になっていて、正堂や庭園などのさらに奥に石壁で囲まれた墓（埋葬施設）があります。しかしながら、カイディン帝以外は実際に皇帝が埋葬されておらず、不明なことも多いといえます。



トウドウック帝陵は庭園が広く美しい



ドンカイン帝陵の埋葬施設



陵墓を守護する石像が並ぶカイディン帝陵、建物 は 仏教・ヒンドゥー教・キリスト教の折衷である

グエン朝は 1945 年にフランスの統治によって滅亡します。世界遺産ではないのですが、ハノイに**ホアロー捕虜収容所**があります。フランスがベトナムを植民地としていた時代に建設された監獄で、ベトナム戦争でも米軍によって使用されました。この間、多くのベトナム人たちがここで過酷な扱いをされてきた負の過去を伝えています。ベトナムの歴史を理解する上で欠かせない、記憶の場に準ずるところだと思います。



ベトナムを訪れてみて、経済の発展が著しくて活気があり、想像していたより治安の良い安全な国だと感じました。ハノイの街を歩いていると、交通量が多いので Traffic 的には危険を感じても Criminal な危険は感じませんでした。私はハノイからフエまで夜行の寝台列車で移動しましたが、とても快適な旅でした。朝になると、車内販売で暖かいフォーを売りに来たのが嬉しかったですね。



ハノイ駅のすぐ北、日本でいうと神田あたりの線路



その踏切を渡ろうとするバイクの集団

最後にご紹介するのが自然遺産の**ハ・ロン湾とカット・バ諸島 (Ha Long Bay - Cat Ba Archipelago)** です。おそらく観光地としてはベトナムで最も人気のある有名な世界遺産ではないでしょうか。石灰岩台地が沈み海洋浸食を受けてできた特異な地形です。ハ・ロンとは「龍が降り立った場所」という意味で、ここでも龍が信仰されていることがわかります。



左端が筆者

クルーズ船の中でオマーンから来たという若者たちと仲良くなりました。世界遺産の知識は、海外の方と打ち解けるための話のきっかけとしても役に立ちます。オマーンにある「カルハットの古代都市」とか「バフラの砦」とかの世界遺産は、彼らも当然のように知っていましたから。

NPO 法人世界遺産アカデミー 正会員

世界遺産検定マイスター

広江 淳良